

井上龍夫著

農業問題の経済学

一九五九年

逸見謙三

戦後近代経済学を農業の分析に応用しようと企てる研究者の数が急増したが、この分野の研究は他の分野のそれに比して著しく日が浅く、従って若干の譚訳書を除くと標準的著作が著しく少い。この分野で従来中心の活躍を続けてきた井上教授が、本書において自己の主張を体系的に示されたことは時宜をえたものであるし、又内容的にいつて大変な労作でもあり、われわれは井上教授の努力に深い敬意を表すると共に、この新著に当然の注目を払わねばならない。

本書の第一の特色は、既に述べた如であるが、体系的著作であるということである。第二は「教科書風」に、しかも「初学」を念頭にして書かれていることである。この分野に属する

グループは日頃自分達の興味だけに従って、自分達にだけ通用する用語で、いわば同人的に討論する傾向が強いのであるから、本書の以上二つの特色は高く評価されなければならない。

本書の第三の特色は、以上とは全く違った意味であるが、井上教授の研究の集大成であるということである。十数年にわたる著者の研究を二分するならば、著者はその前半において本書の第五章、第六章の農産物価格の形成、その変動、あるいは景気変動と農業といった問題にとり組んで来た。その後半においては、著者は農業と非農業間の所得不均衡、あるいは農業における過剰就業の存在を勢力的に究明し続けて来た。これが本書の第二、三、四章をなしている。それに序章の経済成長と農業、第一章の衰頹産業としての農業が序説的部分としてつけ加えられている。第四、第五章が最も格調が高く、部合的には「教科書風」ではなくなっている。従って第三の特色は獨創性に富む（勿論教科書として）ものであるともいいうるのであろう。

この第三の特色は別の面からは批判を受ける原因とならう。例えば、本書は日本農業の産業技術的特色なり、制度的特色なりを過少視しているとも、又国際的局面を軽視しているとも難ぜられるであらう。第五章第三部の農産物価格の不安定性の議論は農産物（米）に対する需要の価格および所得弾力性がある特別の値、特に所得弾力性は都市と農村では異った値を有つ事

に基いている。これは日本経済のある一定の成長段階ないしはある一定の期間についてのみ妥当なことである。日本経済の少くとも簡単な歴史的敘述とか、限定とかを伴わなくては主張しえないことである。しかし本書にはそのような敘述ないし限定は殆んど見られない。(尤も第六章に若干の事実の記述が見られるが、これは限定ではない。限定として見られるのは本書冒頭の日本資本主義の簡単な特徴づけだけである。又国際的局面の考慮も、例えば五五頁等に見られるが、本書はその本質において封鎖体系である。) 井上教授が日本経済の与件に適切な考慮を払えば本書の論旨とはかなり違ったもので、例えば農業 || 非農業間の所得不均衡、あるいは過剰就業現象の存在を説明しようと、人は主張するかも知れない。

しかし評者はこのような点をここで展開しようとは思わない。独創的見解とは常にある特殊局面の異常な強調を伴うものである。いわば、これは各執筆者の問題意識ないし趣味に関する問題であろう。恐らく井上教授は技術的特色なり制度的特色なりに興味を持ちすぎたとなす批判もあるであろう。

本書の第四の特色は論争的であるということである。これも恐らくは独創的著作につきものであるが、井上教授は自分の見解を主張するに際して、多くの場合世上に流布されているいくつかの見解の批判を同時になしている。これは恐らくは「教

科書」としては「初学者」に意外な負担をかけることともならずが、われわれ一般研究者にとつては示唆的である。

ただ残念に思われることは、かなり専門的な討論を教科書風に書いたために、いささか正確さを犠牲にしていることである。例えば、

(1) 農産物に対する需要の問題に、経済全体の需要の法則たるセイの法則を引用したり(三頁)、経済全体の問題たるマルクスの相対的過剰人口の敘述にシュルツのアメリカの事例を引用している(一五九頁)が、これは引用の主旨をもっと明らかにすべきであろう。(引用としては一一一頁におけるシュルツの同様の引用の如きも当然問題とならう。シュルツはこの個所では農業物に対する非農業部門からの需要の大きさを主として論じているのであって、農業からの流出労働力に対する非農業の需要を専ら念頭に論じているのではない。) 又正確さとは関係ないが、例えば生産費曲線における最能限定(一七八頁)の如く定訳とはいきれない専門用語の使用の際には原語を入れるか、若干の解説をすべきであろう。

(2) 余程丹念に読まないで個別企業の場合を論じているのか、産業の場合を論じているのかわからない場合がある。また第二章第四節で普通の意味の労働生産性を高める要因を論じていたと思っていたら、それは物的生産性について論じていたのであ

つたり(八八頁)している。再び価格不安定性の議論に戻るが、一九四頁一七行目の、都市において米に対する価格変動の「所得効果と代替効果が相反することはない」という言明は、その上のマイナス〇・〇四という米の需要の所得弾性値からは出てこない。ここはもっと詳しく論証しなければわからない。

(イ) 少しく独断がある。農業から非農業への労働力の「移動は農業からの自動的な押し出しではなく、非農業における労働力の需要に待たねばならぬ」(一二七頁等)の如きは決して過剰就業論の出発点におかれるべきではなくて、相当の紙幅の分析を費した後に結論さるべきものである。これは現実には過剰就業論の討論に参加している者の作業仮説としてのみ出発点となりうるものである。

(ニ) 第四・二図(井上教授のもの、一四三頁)は評者には本質的に第四・一図(中島助教授のもの、一四〇頁)と同じものように思われる。中島助教授の図における仮定は右上りの労働供給曲線、右下りの限界生産力曲線(需要曲線)、大経営の限界生産力曲線が相対的に小経営のそれよりも右に位置していることだけである。これらの条件は第四・二図でも否定されないように画かれている。唯一つ異なる点は第四・二図では賃金の高さが示されていないことであろう。この点を強調するだけなら、同図に見られるなめらかなでない限界生産力曲線は不要であ

るし、もしそのようななめらかなでないことに強調があるのなら、それは技術的に固定されているのであるから、 $H_1, K_1$ と $K_2, H_2$ とが等しくなる必然性はない。更に労働の限界評価曲線が、筆者の認めるように、動くのであれば、大川教授のいわれるように「全く孤立的な労働行動は日本の農業でも前提しにくい」ということになる。

ここでいささか内容的な疑問を提出したいと思う。第四章は本書中のかなり重要な章であるが、その前半では、要するに農業⇌非農業間で労働市場は不完全であるので、賃金はパラメーターとして作用しえない。従って農業労働の限界生産力を農業の日雇労働によって示すことは出来ないということ、農民所得が都市における賃金より低いことが過剰就業の存在を示すこととなるということを主張している。後半は過剰就業の存在の原因を示している。原因は同教授によれば農業外の要因として $G$ と $g$ との大きさの關係(これは当然二部門に分けて考察されるだろう)と景気循環とがあり、農業内部の要因として労働市場の不完全性とがあげられている。

(イ) 都市の賃金が農業からの労働力の移動の誘引となりながら、農業賃金が農業内部で機能を果しえないとはどういう意味であろうか。大川教授はこの両者の差をもって過剰就業の存在を示すことは「事態を過小に評価」(一三八頁)とさえ但し書きし

ておられる（尤もこれは非農業の労働の限界生産力とその賃金より高いという意味においてである）。農民は非農業の賃金に対する場合と農業内部の賃金に対する場合と本質的に別の行動をとるものであろうか。

(四)もし農業における過剰就業の存在が井上教授の列挙されるものであるとすれば、戦前における農業有業人口の一定は偶然によってのみ果されていたものであろうか。

第四章では就業機会説が重要な役割を演じているが、第五章では豊産物供給函数に関して機会費用説が否定されている（一八〇頁）。その理由は機会費用的な考え方が成立する条件たる労働市場の完全さが欠如していることに基いている（一七九頁）。これは甚だ特徴的である。そして「家族労働費は一定と見なすことが適当」（一八一頁）であり、しかもその家族労働費は「固

定的」ではなく「弾力的」なのである（一八六頁）。これらは同教授の過去長期にわたる持論であるが、第五章の費用曲線の論議は甚だ難解である。更に使用されている時間概念の難しさも加わる。例えば一七五、一八六頁の「かなり長期」（傍点評者）はくせ者である。これは全体の構成から長期、短期という分析上の概念と混同され易いが、それとは縁の薄い感情的表現である。この章は第一節の独占の検討以外は理論的には、全て短期の現象を取扱っている。

ところで、農業は完全競争的で自分の力で左右することが出来ず（一七三頁）、「小農には供給価格が存在しない」（一八七頁）ので、独占的な商人が「まず消費者価格を定め、これから一定のマージン…を差引いて生産者価格をきめる」（一七四頁）のである。だからかなりの長期は経済学の概念での長期かも知れないのである。評者は先に個別企業を論じているのか、産業を論じているのかわからない場合があるといったのは正にこの個所である。評者は第五章に関して過度に意地悪く誤解して見せたかも知れない。しかし「教科書風」であるならばもっと平易に書くべきではなかったかと思われる。

最後に供給函数に関しては評者は従来機会費用説を採っているものであるが、その最も進んだ形であるグレン・ジョンソンの Fixed assets theory は十分に事態を説明していると信じている。又現実の歴史的長期は、概念的には常に短期の連続であり、調整の過程にあるに過ぎないものであることは事実であるが、戦前における固定的農業人口の存在は決してこのような過渡的なものではないことを主張したい。